

絵本に描かれた同性カップルと子どもたちにみる「家族」像

——Patricia Polacco 作品 *In Our Mothers' House* を例に——

堀内かおる

1 問題の所在と本研究の目的

絵本とは、「おとなが子どものために明確な目的を持って創り上げた『文化財』」である(佐々木, 1993)。絵本との出会いによって子どもは、新しい〈知〉の世界の入口に立つことになり、言葉に触れ、描かれたものに感情移入をしながら、心を豊かに耕していく。幼少期の絵本との出会いが、子どもの発達にとって重要な意味を持つことは、言うまでもない。

また、絵本とは「絵と文からなる総合芸術」(井上, 1986)と見なされ、絵と文が互いに補完し合い、相乗効果をもたらして一つの作品に結実している。

子どもは受動的に絵本を享受する読者ではない。子どもには「絵そのものを読む力がある」と、谷本(2002)は指摘する。子どもにとって、絵本に描かれている世界は「自分の生活と地続き」であり、「自分に引き付けた極めて主体的な『読み方』をする」と谷本は述べている。絵本を手がかりとして、子どもには自分自身を見つめる契機がもたらされると考えられる。

近年、社会的マイノリティの中でも性的指向によってマイノリティに位置づけられてきた同性カップルがつくる「家族」を取り上げた絵本が、海外では出版されてきた。しかし、谷口と徳田(1997)の研究によると、日本の絵本においては、同性愛を取り上げた絵本はもとより、社会的マイノリティが登場する絵本は量・質ともに低調であることが指摘されている。谷口と徳田は、社会的マイノリティに対する「適切な理解・態度」は、「時間と場所を単に共有するだけでは形成されない」と述べ、幼児期からの理解教育の必要性を説いている。社会的マイノリティに対する「適切な理解」とはどのようなものなのかについては、慎重な議論を要すると考えるが、絵本という媒体を通じて、子どもにとって想定される「当たり前」の範疇に当てはまらない人々の存在を知り、自分にとって「想定外」の在り方・生き方について気づくことは、子どもの自己認識・社会認識の発達の上で大きな意味をもたらすであろう。社会的マイノリティへの気づきと共生の文化を考える「教材」としても、絵本という媒体の可能性が示唆される。

筆者が調査した限りにおいても、唯一、実話をもとにした翻訳絵本であり同性の2羽のペンギンによる抱卵・育児を主題とした絵本である『タンタンタンゴはパパふたり』¹が、「同性愛カップルの子育て」と解釈することも可能と考えられる絵本であった。本書のほかには、同性愛を直接テーマとした絵本は、見当たらない。

刈谷(2009)は、社会的マイノリティの暗喩である絵本として、R. M. カンターによる『O

の物語』²を紹介している。この絵本は、「大人向け絵本」のジャンルに分類され³、マジョリティである「X」の集団の中に唯一、「O」が存在しているという設定で、「O」がどのような具体的な特徴を持つ存在なのかということは明らかにされていない。XとOという記号で表現された抽象度の高い絵本であり、子どもの読み物としては、難易度が高いと言わざるを得ない。

ところで有田（2007）は、レズビアンである母親の子育てにかかわって、ヘテロセクシュアルな母親との相違を分析した欧米の先行研究をレビューし、レズビアン・マザーの子どもたちは、自分の母親がレズビアンであるという「スティグマ」をどのように受けとめるのかという点を考察している。たとえば事例として紹介されている、ゲイの父親とそのパートナーに育てられ、自分自身はヘテロセクシュアルな娘は、「ゲイである」ということは性的指向のみの問題ではなく、「アイデンティティであり人生でありそして文化である」と認識したという。有田はこの事例を「Queer性を主体化する子ども」と表現した。つまり、このような子どもたちにとって、「自ら内面化している文化がQueer」だということになる。

「多様な家族」がつくる「多様な文化」と対峙し、これからの社会を生きる子どもたちが生き方を選択していくために、今日のさまざまな人間関係のありようを提示していく必要性があると考える。これは、ジェンダーとセクシュアリティにかかわる極めて現代的な教育の課題であろう。

そこで本研究では、近年アメリカで出版された同テーマの絵本であるパトリア・ポラッコ作・画 *In Our Mothers' House* を取り上げ、そこにどのような「家族」像が描かれているのか考察することにした。

2 Patricia Polacco, “*In Our Mothers' House*” について

2.1 作者：パトリア・ポラッコについて⁴

ポラッコはアメリカ合衆国ミシガン州ランシングにて1944年に生まれた女性で、現在はミシガン州ユニオンシティ在住の絵本作家である。2010年8月現在で51冊の絵本を出版しており、自ら文章・イラストレーションをともに手掛けている。

ポラッコの作品には、自身の生い立ちや生活経験が色濃く反映されている。ポラッコは、3歳の時に両親が離婚し、学齢期は母親と暮らし、夏に父親と会う生活を送った。どちらの家にも祖父母がいて、祖父母との交流があった。これらの祖父母との関係は、その後の自身の人生と仕事に大きな影響をもたらしたそうで、作品である絵本の中には、子どもと高齢者とのかわりが多く描かれている。

5歳の時、ポラッコは母と兄とともにカリフォルニア州オークランドに転居し、さまざまな

人種、宗教を信じる近隣の人々にふれ、人々の相違と共通性を多く感じることができた。この経験がこのたび取り上げる *In Our Mothers' House* の基盤となる考え方を形成したと推察される。本書の舞台も、カリフォルニアのコミュニティである。

またポラッコは、学齢期に失読症で長い期間読むことができずにいたが、14歳の時、ある教師との出会いをきっかけに学習障害を克服する。その後、大学に進学し、ファイブ・アートを専攻、続いて博士課程に進学し、美術史の分野で Ph. D の学位を取得した。

やがて二人の子どもの母親となったポラッコは、子育てに多大な時間をかけるようになり、絵本作家としては遅いスタートで、41歳になって、絵本を書き始めたとのことである。現在は、絵本作家として毎年新作を発表するとともに、自宅を地域に開放し、物語作りのセミナーやお話し会などのイベントを行っている。

2.2 ポラッコの作風の特徴について

ポラッコの2010年8月までに発行された作品一覧をノート Table 1 に示す。

刊行されている51冊のうち、イラストレーションのみを担当している19番の作品、言葉の本でありストーリー性のない35番や40番の作品を除き、前項のプロフィールの個所でも指摘した通り、ポラッコは、自身の生い立ちや家族、祖先の人々から言い伝えられてきた事柄をテーマに絵本を創作している〈私〉性の非常に高い作家である。佐々木(2000)は、絵本が作家の子ども時代の体験に深く根ざしていることについて言及し、どのようなエピソードを選択し構成するかということは、『『現在のわたし』の持つ価値観や態度の反映』だと指摘している。ポラッコの作品には、過去の自身の体験から今日に語り伝えるべき、「家族」に関する内容が選択されていると考えられる。

邦訳されているのは5つの作品のみであり、ポラッコは、作品数が多い割には日本で紹介されてこなかった作家のひとりであるといえるだろう。

作品のテーマは「祖父母」「きょうだい(兄と妹)」「家族が直面した出来事」「学習障害を持った子どもと教師」「南北戦争」「動物とのふれあい」「友達」そして祖母の故郷であるロシアの民話を土台にした物語に大別される。しばしば登場する少女の名前にトリシャ(Trisha)という名前があるが、これはパトリシア・ポラッコ自身であり、自伝的要素が強い作品である(作品番号17, 26, 51)。

また、ポラッコの祖先が南北戦争で従軍し、北軍の少年兵として奴隷制度廃止のために戦っていた時に起きた実話である、黒人兵の少年との別離を当時の社会背景のもとで描いた *Pink and Say* (作品番号16、千葉茂樹訳『彼の手は語りつく』あすなろ書房)は、2001年に翻訳出版されてから今日までに14刷を重ねている。この物語は、「たとえ奴隷でも、自分の本当

Table 1 Patrica Polacco の著作一覧 (1988~2010)

番号	タイトル	出版年	邦訳の有無	番号	タイトル	出版年
1	Meteor!	1988		27	Mrs. Mack	1998
2	Rechenka's Eggs	1988		28	Wellcome Comfort	1999
3	Boat Ride with Lillian Two Blossom	1989		29	Luba and the Wren	1999
4	Uncle Voca's Tree	1989		30	The Butterfly	2000
5	Thunder Cake	1990	○注 ¹	31	Betty Doll	2001
6	Appelemando's Dreams	1991		32	Mr. Lincoln's Way	2001
7	Chicken Sunday	1992	○注 ²	33	When Lightning Comes in a Jar	2002
8	Picnic at Mudsock Meadow	1992		34	Christmas Tapestry	2002
9	The Keeping Quilt	1993		35	"G" is for Goat	2003
10	The Bee Tree	1993		36	The Graves Family	2003
11	Babushuka Baba Yaga	1993		37	Oh Look!	2004
12	Just Plain Fancy	1994		38	John Philip Duck	2004
13	Some Birthday!	1994		39	An Orange for Frankie	2004
14	Mrs.Katz and Tush	1994		40	Mommies Say Shhh	2005
15	Tikvah Means Hope	1994		41	The Graves Family Goes Camping	2005
16	Pink and Say	1994	○注 ³	42	Emma Kate	2005
17	My Rotten Redheaded Older Brother	1994	○注 ⁴	43	Rotten Richie and the Ultimate Dare	2006
18	Babushuka's Doll	1994		44	Something About Hensley's	2006
19	Casey at the Bat	1995		45	Ginger and Petunia	2007
20	My Ol' Man	1995		46	The Lemonade Club	2007
21	Babushuka's Mother Goose	1995		47	For the Love of Autumn	2008
22	Aunt Chip and the Great Triple Creek Dam Affair	1996		48	Someone for Mr. Sussman	2008
23	I Can Hear The Sun: A Modern Myth	1996		49	In Our Mothers' House	2009
24	The Trees of The Dancing Goats	1996		50	January's Sparrow	2009
25	In Enzo's Splendid Gardens	1997		51	The Junk Yard Wonders	2010
26	Thank You, Mr. Falker	1998	○注 ⁵			

注1 邦題『かみなりケーキ』、小島希里：訳、あかね書房、1993

注2 邦題『チキン・サンデー』、福本友美子：訳、アスラン書房、1997

注3 邦題『彼の手は語りつぐ』、千葉茂樹：訳、あすなろ書房、2001

注4 邦題「おにいちゃんなんてだいきらい」、in『科学と学習の増刊・読み物特集号、話のびっくり箱4年下』もきかずこ：訳、学習研究社、2000

注5 邦題『ありがとう、フォルカーせんせい』、香咲弥須子：訳、岩崎書店、2001

の主人は自分以外にはいない」という黒人少年の言葉とともに、ポラッコ家に5代にわたって語り継がれてきた。

ポラッコの作品には、アフリカ系アメリカ人の家族や子どもたちが多く登場する。その背景には、南北戦争時にさかのぼる祖先への思いや、カリフォルニア州オークランドに住んでいたころの隣人で、子どもの頃「きょうだいになる誓いの儀式をした」相手である、アフリカ系アメリカ人のスチュワートとウィンストン・ワシントンという兄・弟とその母親との交流が反映していると考えられる。⁵

一風変わった家族の日常をユーモラスに描いた36番の作品は、書評⁶においてポラッコのこれまでの作品の中で最も愉快な作品と評されると同時に、本書に込められたメッセージとして「違いは祝福されるべきものであり、恐れられるものではない」という言葉が与えられている。この言葉の含意こそは、ポラッコの他の作品にも同様に根底に流れているものであり、ポラッコ作品のコンセプトである。

ポラッコの作風を端的に言うならば、基本的に「ヒューマニズムの作家」であるといえるだろう。歴史の中の人間存在やその生き方について実話をもとに具体的な描写をし、社会に対するクリティカルな視点を有しつつ、あくまでも人間を信じ家族の愛や絆に確信を持つ姿勢がその作品の端々から伝わってくる。

また、作家自身の生活を紹介する写真絵本⁷には、「私の家族へ」との言葉とともに、ポラッコ夫妻とポラッコの母、娘と息子およびその配偶者と子どもら総勢9名がそろった写真が掲載されており、「家族」という集合体への自身の強い帰属性がうかがわれる。

2.3 *In Our Mothers' House* の概要とレズビアン・マザーズの描かれ方

本書は、養子として迎えられた長女の目から見た、「家族」の思い出が語られる内容となっている。登場人物は、二人の母親：マミーとミーマのほかに、長女（アフリカ系）、長男（ウィル：アジア系）、次女（ミリー：赤毛のコーカソイド）の3人の子どもたち、イタリア系の祖父母と様々なナショナルリティを背景に持つ地域の住人たちである。

本書には、成人し自らの家庭を築いた長女の視点で、生まれてから現在までの自分と家族のライフコースが描かれている。時系列で「家族」の推移を描いているところに、本書の特徴がある。

本書では、数々のファミリー・ライフイベントが設定され、子どもの誕生から親の老い、そして死までの時間軸に則って「家族」という関係が描写されている。

また、二人の母親：マミーとミーマは、相補的で異なるキャラクターとして描かれている。

ミーマは、背が低くて太っており、イタリア系で料理好き。縫物も好きな家庭的な性格とし

て描かれ、小児科医である。マーミは、背が高く痩せており、計画的で論理的、きれい好きで家の掃除を担当している。救急医療担当の医師で、救急車に乗っている。非常事態でも落ちついて責任を果たすというキャラクターである。おのずと家事労働の分担もなされており、得意なことを担当しあって協力して生活を営んでいる。

二人の母親たちはいずれも医師で、キャリアのある専門職として描かれており、職業上の成功をし、安定した家庭生活を営んでいることが読み取れる。

一家が生活している場所は、カリフォルニア州のパークレーという具体的な設定となっている。ハロウィーンのとくに子どもたちは、ミーマの手作りの衣装で扮装し、町内の仮装大賞を受賞するほど好評を博したという思い出が語られる。家の裏庭には、地域の人々に手伝ってもらって作ったログハウスがあり、そこは地域の人々との語らいの場にもなっていた。二人の母親たちは地区の伝統行事であるフェスティバルを取り仕切り、地域の人々の中心となって交流し合っていた。また「母さんたちの家」は親族の集いの場にもなっており、イタリア系の祖父は料理が得意で、訪れて来ては皆にイタリア料理をふるまった。

以上のように、「母さんたちの家」は親しい人々が集う中心地となっており、同性カップルである母親たちは違和感なく周囲に溶け込み、暮らしていた。しかしただ一人だけ、正面から彼女らに批判的な態度をとる近隣の女性が登場するが、この人物は例外的存在として描かれている。

「あなたたちを認めない」と言い放って立ち去って行った彼女について、ミーマは子どもたちに「彼女は私たちのことを理解できないから不安なのだ」と言う。さらに付け加えて、「彼女には、少しも愛情なんてものはないのだ」と言うのである。ここでいう「愛情」とは、隣人愛であり、人に対する思いやりの気持ちであろう。同性カップルである母親たちおよび血縁関係のない子どもたちを受け入れられない住人は、寛容さに欠ける偏狭な人間として描かれている。

ところで、本書には子どもたちの自立と母親たちの老いが描かれている点に着目したい。3人の子どもたちは、やがて家を離れ進学したのち、いずれも異性の配偶者を得て、自分たちの家庭を創っていった。

その後、自分たちの子どもを連れて、母親たちの家を訪れ、母親たちが孫の成長を喜ぶ穏やかな老後の日々が描かれている。年月とともに母親たちも老いていき、やがて相次いで亡くなり、子どもたちの手で思い出の場所に埋葬された。

母親たちの死後、長男が家を受け継ぎ、長男一家がそこに暮らしている。季節の折々にきょうだいたちの家族は「母さんたちの家」に集い、そこで育った日々のことを懐かしく思い出するというストーリーである。

本書におけるレズビアン・マザーたちは、同性愛コミュニティではなく地域コミュニティの中で生きている。その地域コミュニティは、多民族・多文化のつぼであり、宗教や文化的ルーツを異にする人々が共生しているコミュニティである。同性愛も一つの差異として描かれ、同性愛が本書の突出したテーマにはなっていない。

本書の主題は、「次世代に継承されていく『家族』」であるといえよう。互いへの信頼と愛情を絆としてともにいることの意味を認識し合い、かけがいのない存在として認めあった関係＝「家族」と位置づけられ、その関係性は親が亡くなり相互には血のつながりのない子どもたちだけが残されても、精神的なつながりによって次世代へと継承されていく。これが、「家族」と呼ばれる関係性の実態にほかならないというメッセージを、本書から読み取ることができる。家族の永続性の象徴として描かれているのが、「母さんたちの家」なのである。

以上のような本書のメッセージは、親密な関係性の根底にある理念として、性的指向を問わない普遍的な「家族」の成立条件であるとの解釈を可能にする。しかしこのことは、換言すると、カップルの形態や「家族」のなりたちは異なるが、本質的には相違ない「伝統的家族」像へと収斂して「家族」が語られるということにもなる。

3 同性カップルという差異と「家族」の普遍性のパラドックス

今日、「多様な家族」の存在が指摘され、それに対する受容性が高まってきているとはいえ、想定されている「家族」は離婚や未婚で子どもを産んだシングルマザー／ファザーによる「一人親家族」や単身者が視野に入っているくらいではないだろうか。これらは、国勢調査等の統計にも数値として表れる「家族」の形である。

日本において、同性カップルとその子どもという「家族」に対する研究は、緒についたばかりである。釜野（2008）は、レズビアン家族とゲイの家族が「従来の家族」の在り方を揺さぶる問題提起となる可能性について論じているが、そこで浮かび上がってきたのは、「一見革新的」な生き方に見えようとも『従来の家族』の規範に加担する可能性がありうる」という問題である。

前節で考察したように、ポラッコの絵本が描いていた「家族」のストーリーは、まさに「従来の家族」の規範の範疇に同化することによって、「家族」であることを知らしめるというパラドックスを内包している。同性カップルであっても子どもたちに囲まれ地域の人々と仲良く交流し、親戚との行き来を重ねて穏やかに年を重ねるといような、「夫婦」の愛情によって結ばれた近代家族像と何ら変わりはない。ただ「夫婦」が同性同士であったというだけである。つまり、久保田（2009）が指摘するように、まさに「家族と呼べる範囲でしか多様性を認めない」という状況に陥り、『家族の多様化』ならぬ〈多様性の家族化〉と呼べる現象が、

ポラッコの著作にも見え隠れしている。

他方、ポラッコの作品における「家族」像が単に近代家族像の中に取り込まれているのかといえば、同性カップル・異性カップルを問わず、「家族」で自己完結せず、地域や社会に開かれた関係性が示唆されている点を見逃すことはできないだろう。同性カップルに限らず、どのような「多様性」であったとしても、周縁に広がる人的ネットワークで地域や社会とつながっていることによって、「従来の家族」の持つ閉鎖性を打破する可能性が見出されるのではないだろうか。

またその一方で、同性カップルとその子どもたちで作る新たな関係を、「家族」と呼ばなければならないのか、それはなぜかという理由を改めて問うことは、「多様な家族」の在り方を追求するうえで、不可避であるように思う。「家族」概念を拡大することが「家族」の定義そのものを読みかえることにはならないだろう。同性カップルを描いた絵本が提起しているのは、法的規範や血縁によらない親密な関係性が「家族」のオルタナティブになりうるのかという、本質的な問いであるといえよう。

4 おわりに

欧米でこれまで出版された同性愛をテーマにした絵本がバッシングの対象となった⁸ことと対照的に、本書が同性愛バッシングの標的になり論争を引き起こしたという話題は聞かれないう。むしろ、本書は書評で好意的に取り上げられ、大人の読者からも本書に対するエールが送られている。⁹

さらに、本書の出版元は、出版大手であるペンギン社の児童・青少年向け書籍部門であるPhilomel Booksであることを鑑みても、幼児・児童書の一つのジャンルとして、偏見なく本書が取り上げられていることが明らかである。今日刊行され市場に流通しているポラッコによる*In Our Mothers' House*は、ヘテロセクシュアルな子どもたちやその親たちによっても、読まれていると考えられるのである。

本書に対するバッシングが発生しない理由として、第1にポラッコによる*In Our Mothers' House*が出版されたのは2009年であり、同性愛をめぐる時代背景が推移したこと、第2にポラッコ自身が著名な絵本作家として数々の賞を獲得した輝かしいキャリアを持ち¹⁰、社会的に認められている存在であることも一因となっていると考えられるが、根本的な理由は、他にあるように思われる。それは、本書のコンセプト自体に起因するものである。

つまり、同性カップルという「多様性」が「家族」というステレオタイプなイメージで共通理解できる範疇へと還元されるものであったからこそ、本書の内容に対し、人々が違和感や異議を唱えることがなかったのではないだろうか。このような「同性愛への理解」が果たして

確なことなのかどうか、検討の余地があると考え。

本稿では、絵本という、子どもにとっての文化財であり教育的意義を持つ媒体を取り上げ、そこに込められている「家族」の多様性の意味を読み解こうとした。その結果明らかになったのは、「多様性」という名のもとに収斂し強化される「家族」観にほかならなかった。

しかしその一方で、「家族」という共同体が周縁に向けて開かれていく可能性もまた、ボラッコの作品から示唆された。

こういった今日の絵本の限界と可能性を踏まえたうえで、子どもたちがオルタナティブな生き方や関係性の在り方に気づくためのストーリーを追究する必要がある。同時に、メッセージの受け手である子どもたちにとって、オルタナティブなストーリーはどのように受け止められるのかという、子どもたちの視座に立った検討も不可欠である。今後の課題としたい。

References

- 有田啓子. (2007). 「スティグマ化された家族の多様性の『発見』—英語圏の発達心理分野における Lesbian-family 比較研究の検討」. *Core Ethics*, 3, 13-26
- 井上共子. (1986). 「第 1 章 絵本総論」. In 井上共子 (Ed.), 『保育の絵本研究』. 東京: 三晃書房. 9
- 釜野さおり. (2008). 「レズビアン家族とゲイ家族から『従来の家族』を問う可能性を探る」. 『家族社会学研究』 20 (1), 16-27
- 刈谷雅. (2009). 「『O の物語』から考えるセクシュアル・マイノリティ」. In 中川素子 (Ed.), 『女と絵本と男』. 東京: 翰林書房. 49-54
- 久保田裕之. (2009). 「『家族の多様化』論再考—家族概念の分節化を通じて」. 『家族社会学研究』 21 (1), 78-90
- Matulka, Denise I. (2008). *A picture book primer: Understanding and using picture books*. CT: Libraries Unlimited. 168
- Polacco, Patricia. (2009). *In our mothers' house*, NY: Philomel Books
- 佐々木宏子. (1993). 『新版絵本と子どものころ——豊かな個性を育てる』. 東京: JULA 出版局. 16
- 佐々木宏子. (2000). 『絵本の心理学——子どもの心を理解するために』. 東京: 新曜社. 128
- 谷口愛・徳田克己. (1997). 「社会的マイノリティが登場する『絵本』の分析 I—マイノリティに関する理解促進のための幼児用理解教育教材の分析方法の検討」. 『日本保育学会大会研究論文集』 516-517
- 谷本誠剛. (2002). 「現代絵本と子ども読者」. In ワトソン, ヴィクター & スタイルズ, モラグ (Eds.), 『子どもはどのように絵本を読むのか』 (谷本誠剛, Trans.). 東京: 柏書房. 16-18

Author Note

本研究は、平成 21~24 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 (C)）自分の成長と家族関係を省察する小中一貫の家庭科授業開発」（課題番号 21530918、研究代表者：堀内かおる）の成果の一部である。

Footnotes

- ¹ Author: Peter Parnell and Justin Richardson, Illustrator: Henry Cole, *And Tango Makes Three*, Simon & Schuster Children's Publishing, 2005 (尾辻かな子・前田和男 Trans., 『タンタンタンゴはパパふたり』(2008). 東京: ポット出版)
- 本書はアメリカ図書館協会の選ぶ2006年度の最もチャレンジブルだった本に選ばれた(Matulka, 2008)。さらに、同協会から2008年度の「もっとも頻繁にチャレンジブルであり続けた本」としても選ばれた絵本である。Reviewed 30 August, 2010, from <http://www.ala.org/ala/newspresscenter/news/pressreleases2009/april2009/nlw08bbtopten.cfm>
- ² R. M. カンター. (1989). 『Oの物語』(三井マリ子, Trans.). 東京: レターボックス社.
- ³ Retrieved 31 August, 2010, from <http://www.junkudo.co.jp/detail.jsp?ID=0189246268>
- ⁴ Retrieved 30 August, 2010, from <http://www.patriciapolacco.com/>
- ⁵ 『チキン・サンデー』(福本友美子, Trans.) には、ワシントン親子との交流の様子が描かれている。
- ⁶ Retrieved 4 December, 2010, from http://www.patriciapolacco.com/books/_graves/index.html
- ⁷ Polacco, Patricia. (1994). *Firetalkings*, New York: Richard C. Owen Publishers, Inc.
- ⁸ 1980年代から1990年代に出版された同性カップルを描いた主な絵本として、以下のものがある。
- Bösche, Susanne, translated from the Danish to English: Mackay, Louis (1983) *Jenny lives with Eric and Martin*. London: The Gay Men's Press; Newman, Leslea. (1990, 2000, 2009). *Heather has two mommies*. NY: Alyson Books; Willhoite, Micheal. (1990). *Daddy's Roommate*. NY: Alyson Wonderland; Willhoite, Micheal. (1996). *Daddy's Wedding*. CA: Alyson Wonderland.
- ⁹ Retrieved 31 August, 2010, from <http://libraryvoice.org/2009/06/05/book-review-in-our-mothers-house-by-patricia-polacco/>
- ¹⁰ Retrieved 30 August, 2010, from <http://www.patriciapolacco.com/author/bioandawards/bioawards.html>

**An Image of "Family" in Homosexual Couples in Picture Books:
With Special Reference to Patricia Polacco's *In Our Mothers' House***

Kaoru HORIUCHI

This study examines how picture books provide children with an opportunity to be aware of issues of gender and sexuality by focusing on foreign picture books dealt with a homosexual couple and their children. It explores the possibilities and limits of the works' messages concerning "the diversity of family" through analysis of images of "family" in picture books.

Published in 2009, Patricia Polacco's *In Our Mothers' House* has gained reputation as an important work itself without being subjected to homosexual bashing. Although this reflects current changes in the public's social background and awareness, this research note demonstrates that the couple in this work is depicted in a relationship with stereotypical concepts of the family, following the conventional family norm, even though it deals with homosexual couples. The study also suggests that picture books are a medium that provides children encounters with new knowledge that can enforce the traditional norm of family.

Keywords:

homosexual couples, picture book, alternative, the diversification of family, Patricia Polacco